

本願寺「自死問題実態調査」の 分析結果 (7)

教学伝道研究センター
現代宗教課題研究部会

■はじめに

自死問題アンケート調査は、今回で第七回目となります。今回報告させていた
だく箇所は、最後の設問の前半部分です。
設問は、

設問(1) 今後、僧侶はどのような取
組みをすべきでしょうか。以下の選択
項目の中からもつとも喫緊の課題だ
と思われるものを1つお選びください。
また、その他の活動や具体的な活動が
ございましたら、自由記述欄にお書き
ください。

というものでした。端的に申せば、具
体的に、どんな活動・取り組みをすべき
をお尋ねしたわけです。選択項目とし
ては、以下の六つを用意しました。

〔1〕社会的啓発活動

〔2〕自死予防（電話相談、面談など）

〔3〕自死遺族の心のケア

〔4〕諸機関・諸団体とのネットワーク

構築

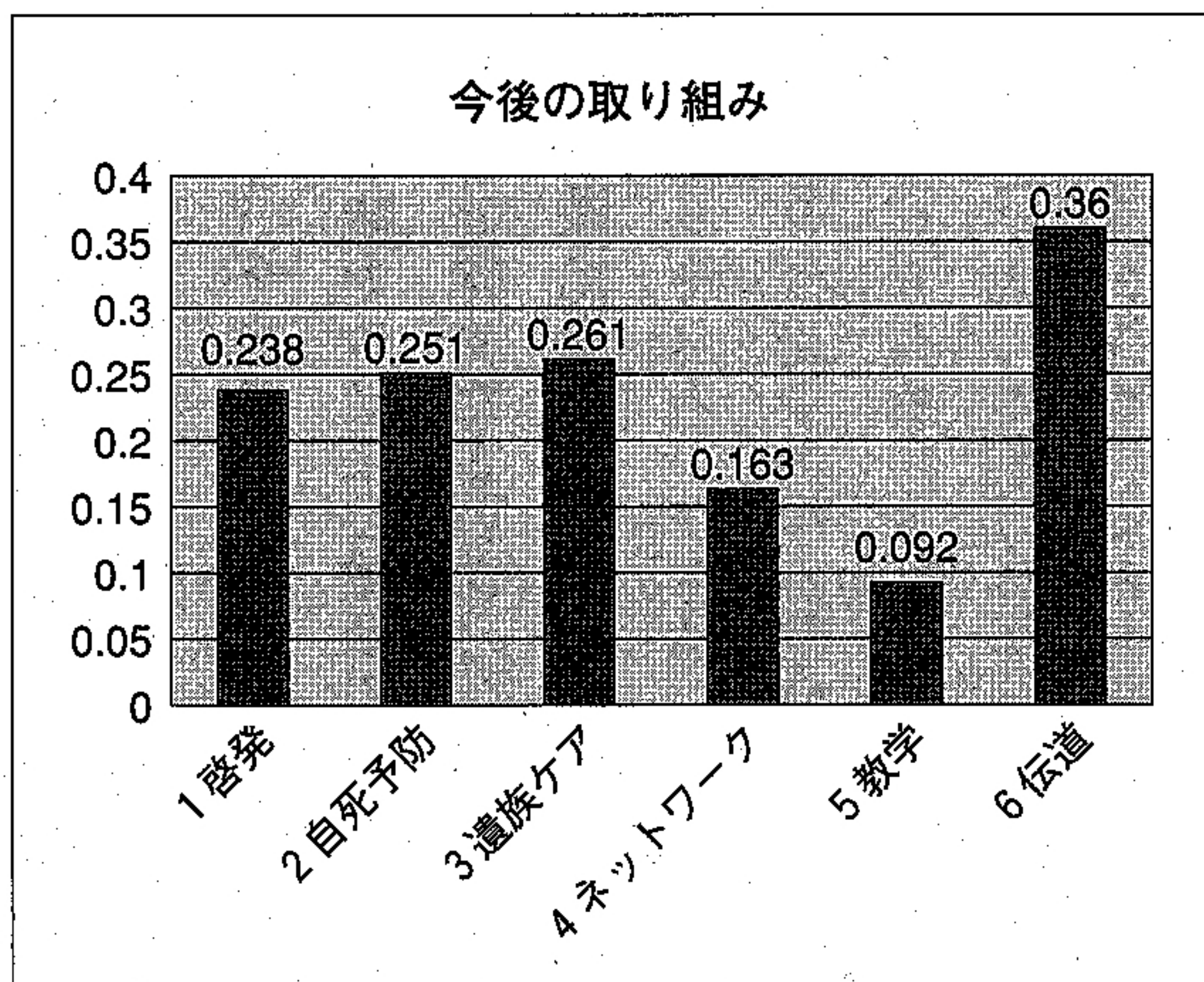
〔5〕教学の研鑽

〔6〕布教・伝道活動
まずは、この選択項目の結果について、
報告させていただきます。

■喫緊の課題

選択項目部分の結果は、図1のよう
になりました。

今後の取り組みとして最も多かったの
は、「布教・伝道活動」（以下、布教伝道）
で全体の三六%の方が選択されました。
つまり、三人に一人以上が選択されたこ



〈図1〉

となります。

その他の項目について見てみると、「社会的啓発活動」(以下、啓発)、「自死予防(電話相談、面談など)」(以下、予防)、「自死遺族の心のケア」(以下、遺族ケア)については、ほとんど数字にばらつきは見られず、およそ四人に一人、二五%前後の方が、取り組むべき課題と指摘されています。

これらと比べて低い値となったのが、「諸機関・諸団体とのネットワーク構築」(以下、ネットワーク)と、「けんさん教学の研鑽」(以下、教学)です。前者はおよそ一六%の方、後者では九%の方が選択されています。

数字だけを比較すると、「布教伝道」の数字が高く、「教学」の数値が低いと指摘することができます。

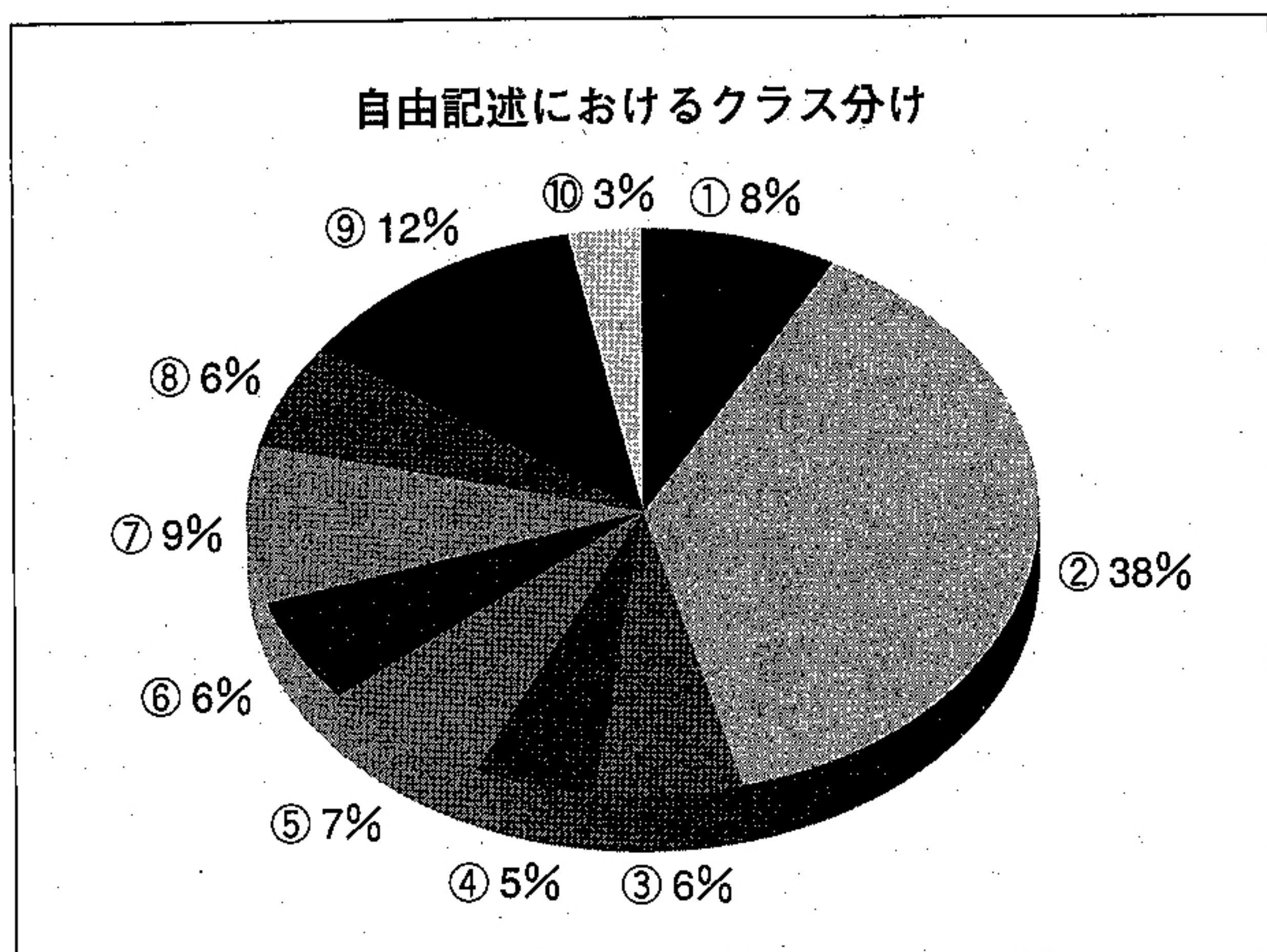
■自由記述全体について

次に、設問(1)の自由記述について、見ていきましょう。

今回の自由記述については、教学伝道

研究所東京支所の雲居玄道氏の協力により、K-means法というクラスタリングを実施いたしました。この方法によって、自由記述が、図2の通り、十個にクラス分けされました。

- ①いのちの大切さの布教・伝道
- ②教学の学び、ネットワークを基礎とした布教・伝道
- ③遺族ケア
- ④社会問題の学びと対応



〈図2〉

- ⑤相談・予防
- ⑥コミュニケーション
- ⑦基礎知識の学習

- ⑧お寺
- ⑨僧侶
- ⑩原因の明確化

これらの内、先の選択項目の中に含まれていたのは①②③⑤⑦であり、④⑥⑧⑨⑩は直接関連しない視点となつています。ただ④と⑩は広い意味での「啓発活動」に含まれますから、異なった視点として出てきたのは⑥コミュニケーション、⑧お寺、⑨僧侶となります。まずは、この十のクラスそれぞれについて、簡潔に説明していきましょう。

〈クラス①〉

ヘクラス①のキーワードは、「布教伝道」と「いのちの大切さ」です。先ほど説明したように、全体としては三人に一人が「布教伝道」を選択されました。一方、このヘクラス①に限定してみると、その倍、つまり三人に二人以上が「布教

伝道」を選択されています。この結果から、ヘクラス①は「布教伝道」が重要であると考えていると言えます。ただ、「布教伝道」を選択された方は、このクラスにだけ含まれているわけではありません。例えば、この後に見るヘクラス②にも含まれています。

それでは、このヘクラス①の特徴はどこにあるのでしょうか。二つの特徴を指摘することができます。一つは、何を「布教伝道」すべきかが記述されているという点です。具体的に言えば、このクラスでは、「いのちの大切さ」「いのちの尊厳」を「布教伝道」すべきと記述しています。

もう一つの特徴は、選択項目の比較から明らかになってきます。前述のように、ヘクラス①は「布教伝道」が重要であると指摘しているのですが、一方で、「教学」の項目は、ほとんど選択されていません。

以上の結果から、ヘ分類①は、「布教伝道」が重要と考えるが、「教学」につ

いてはあまり重要でないと考え、「いのちの大切さ」を「布教伝道」すべきと考えているクラスということになります。

ヘクラス②

ヘクラス②のキーワードは、「布教伝道」と「ネットワーク」です。

特徴として五つの点を挙げることできます。

一「ネットワーク」と「教学」の選択数が多い。

二ヘクラス①と同様に、「布教伝道」に言及。

三「ネットワーク」「連携」について言及。

四「連研」などの宗門の研修に言及。

五十のクラスの中で、最も多くを占めている（三八％）。

以上の特徴からヘクラス②については、「布教伝道」が重要だが、その「布教伝道」の基礎として、連研や基幹運動推進協議会といった場での教学の学びや、専門家とのネットワークの中での情

報収集が必要であると考えているクラスと言えます。

ヘクラス③

ヘクラス③のキーワードは、「遺族ケア」です。遺族ケアは、選択項目の「3」にあたりますが、このグループでは五〇％がこの「3」を選択していることから、このグループが、「遺族ケア」を重視していることがわかります（全体では、二六％）。

また、記述内容の特徴は、遺族心情への記述です。具体的には、「傷付けているかも知れないと自覚しつつ」「心中に抱えていらつしやる想いを、ささいな会話の中で何気なくケアしていきたい」「こちらの心を開いて接する」「心にしみ入るように」「一人ひとり個別のケアをこころがける」といった記述がなされています。一方で、ケアの困難さや研修の必要性、さらに専門家や外部団体との「連携」についての言及も見られます。

このヘクラス③からは、遺族の心情

に配慮しつつ、よりよきケア・サポートについて模索している僧侶の姿が窺えます。

〈クラス④〉

〈クラス④〉のキーワードは「社会」です。このクラスの特徴は極めて顕著で、例外なく「社会」について言及しています。

「社会」に関する記述内容は、以下の三つに分類できます。

- 一 希望のない社会、ゆがんだ社会構造となっている。
- 二 社会問題に目を向け、学ぶべきである。
- 三 僧侶の社会への対応、教学の社会への対応が不十分である。

「社会」への対応という問題については、本アンケートの意識調査（設問Ⅲ）と比較して見ていくことが可能です。意識調査では、自死の原因として「社会的な要因が強くはたらいっていると思う」という問いを設けました。これに対して、

七八%の方が「思う」「やや思う」と回答しており、社会的な要因についての意識が高いことが確認されました。しかし、意識調査（設問Ⅲ）の自由記述については全体の二一%が「環境要因」について言及したものの、具体的な「社会的な要因」への言及は、極めて少数にとどまりました。この意識調査の結果と、〈クラス④〉の社会問題を学び、対応する必要があるという記述内容との間には、社会的要因の重要性はわかっているが、より具体的な情報は不足しているという同様の傾向を見ることができるといえます。

なお、ライフリンク『自殺実態白書』は、「健康問題」「うつ病」は、自殺にいたる最終段階である可能性が高く、そうした状況に自殺者が追い込まれる社会・経済的背景を明らかにしなければ、有効な自殺対策を立てることは難しい^{vii}（傍線、筆者）と報告しています。自死問題と社会のあり方とは、深く関係しています。その社会のあり方について、僧

侶や寺院は、その独自性を活かしていかに関与していけるのでしょうか。この点について見極めていくためにも、社会との関係の中で、「教団」「寺院」「僧侶」について考えを深めていく必要があると言えらるでしょう。

〈クラス⑤〉〈クラス⑥〉

〈クラス⑤〉のキーワードは、「相談」と「予防」です。選択項目と比較すると、「予防」を選択した値が五〇%を超えています。「予防」については、選択項目中に「自死予防」という項目を挙げており、この言葉に喚起されての自由記述であると見ることができます。

このグループの記述内容は大きく二つに分けることができます。一つは、「相談窓口の設置」であり、もう一つは「相談される僧侶」という記述です。

後者については、『宗報』十月号に、「自死が起こってしまう前に（念慮者から）相談を受けたという経験は約十五%」で、僧侶への相談が「必ずしも多くない」

と分析しました。^{viii}

これに関連するのがヘクラス⑥です。このグループのキーワードは、「コミュニケーション」です。「コミュニケーション」といっても、コミュニケーション能力について言及しているのではなく、「普段」の人間関係を大切にし、「日常の」コミュニケーションが必要であると指摘しています。

以上から、ヘクラス⑤とヘクラス⑥は、自死予防においては、「相談」されることが大切であり、そのためには「相談窓口」があることと、「相談される僧侶」であることが大切であると指摘しており、「相談される」ためには「日常」の人間関係が重要であると考えていると言えます。

ヘクラス⑦

ヘクラス⑦のキーワードは、「基礎知識」「学習」「勉強」です。選択項目には、あまり特徴が表れていません。このクラスは、全体の一割程度ですが、選択項目

に、「基礎知識」「学習」「勉強」を直接意味する項目がないことを考え合わせると、この数字を低く見ることはできません。

「自死」についての「基礎知識」を「学習」し、「勉強」すべきという記述は、裏返せば「自死」に関する情報不足を意味していると考えられます。この連載中でもしばしば指摘してきたことですが、「自死問題」は、情報不足と、そこから生じる偏見によって、問題を一層複雑で困難なものとしています。「自死」は、二十〜四十五歳の男性、十五〜三十五歳の女性においては、死因の第一位となっています。こうした現状を直視し、悪性腫瘍や心疾患などの他の主たる死因と同様に、「自死」という死について正面から向きあい、情報が共有されていかなければならないと言えます。

ヘクラス⑧

ヘクラス⑧のキーワードは「お寺」です。記述は以下の三点にまとめられま

す。

一 人びとの集うお寺

「悩みを持った方が訪れるお寺」

「オープンなお寺」

「お寺の敷居が高い」

「さまざまな行事を行い、人びとの繋がり結び目に」

二 情報発信するお寺

「専門的な知見に基づく情報の書かれた本を発行配布し寺で配る」

「教義上の問題として研究し、寺院から発信する」

三 活動拠点

「お寺でグリーンフケアに取り組み始めた」

「専門家と連携してお寺で活動」

「お寺をさまざまな活動、ネットワークの拠点に」

こうした寺院機能の見直しは、重要なポイントと言えます。『宗報』十一・十二月合併号でも若干触れましたが、日本には七万軒以上のお寺があります。この数字は、四万から五万と言われるコンビ

二の店舗数を上回っています。この数字からも、日本社会における「寺院」の持つ意味は、決して小さくないと言えます。また、自死の活動に携る中でも、しばしば寺院機能への期待の声が聞かれます。自死問題に対して、お寺で何ができるのか、お寺全体でどんな活動が起こせるのか。こうした課題について考え、それを具体化させていくことは、私たちの宗門にとどまらない、仏教界全体にとって大きな課題と言えるでしょうし、また、そこには大変な可能性が秘められているとも言えるでしょう。

教学伝道研究センターでは、「シリーズ お寺はかわる」を『宗報』に連載し、お寺の可能性について情報発信してきましたが、その中で紹介してきた寺院の活動事例も参考になることでしょう。

〈クラス⑨〉

ヘクラス⑨のキーワードは「僧侶」です。自由記述の内容が、「僧侶の資質」に集中している点が顕著な特徴となつて

います。すなわち、「僧侶の資質の低下」を指摘し、僧侶研修会などにおいて研修し、教学を研鑽し、他の団体などと連携していくことで、僧侶の資質を向上させていくべきであるという内容となっています。

〈クラス⑩〉

ヘクラス⑩のキーワードは「原因」です。取り組みのためには、原因を明確にする必要があるという点から記述されています。自死に至る原因が複合的、多様であると指摘されています。

■教学・研修・学び

以下では、前述の十の分類を、二つの視点から横断的にまとめておきたいと思っています。

一つ目は、「教学・研修・学び」です。これに関連するのは、ヘクラス②ヘクラス④ヘクラス⑦ヘクラス⑨です。

まず、「自死問題」に関連して、「布教・伝道」やその他の場で情報を発信し

ていくために、基礎的な情報・知識が必要であることは言うまでもありません。この情報・知識は、二つに分類できます。

一 現代的問題としての「自死」

二 仏教教義・真宗教義上の「自死」

一つ目については、あらためて論じる必要はありませんが、これまで自死問題については、情報が不足し、また誤った情報も多く流布していました。こうした現状がある中、正しい情報を持つことには、重要な意味があると言えます。

より注目すべきは、二点目です。仏教の典籍には、「自死」に関する記述が豊富に見られます。他の世界宗教や、日本の他の諸宗教と比較しても、例外的な豊富さと言えます。これは、仏教の特色とも言えます。一つには、仏教がそもそも「死」を見つめる宗教であったことに由来していると考えられます。仏典の記述を見ていくと、念慮者に対して「いのちが大切である」といった教えを説く場面は見られません。サンガの記録を見ると、例えば献身的な看護を行うことなどによ

って、自死に結びつく要因を具体的に取
り除こうとする努力がはらわれていま
す。こうした、仏典の記述から、私たち
が学ぶことは多いのではないでしょう
か。詳しくは、『宗報』十月号の二十六
〜二十七頁をご覧ください。

また、浄土真宗においては、「平生業
成」を説き、死に方の善し悪しを論ずる
こともしてきませんでした。このことも
自死問題に対して、重要な視点を提供し
ているのではないでしょうか。

このように、「自死」の学びは、教義
の学びと離れたところにあるものではな
いということを、仏教者・念仏者として
自覚しておく必要があります。この点か
ら「自死」の学びは、僧侶の資質向上へ
も結びつくものと言えます。

なお、教学伝道研究センターは、研究
員を自死に関連するワークショップや体
験型の研究会に派遣しています。こうし
た研修も、僧侶の資質向上に繋がる要素
を多分に持っていることも指摘しておき
たいと思います。

■お寺を拠点として

お寺を拠点として、自死問題の活動を
進めるということについては、ヘクラス
③▽ヘクラス⑥▽ヘクラス⑧▽が関係して
います。広い意味では、ヘクラス⑨▽も
関連していると言えるでしょう。皆様か
らいただいた記述を元に、お寺を拠点と
した記述内容を分類すると、以下の二つ
になります。

一 遺族ケアの拠点

二 相談の窓口

これら二つが、お寺を拠点とする活動
として提示されていますが、重要なのは、
この二つの活動に関する記述には、「連
携」「ネットワーク」がキーワードとし
て隠れているという点です。

個々の寺院や僧侶の活動には、やはり
限界があります。そうした中で、多くの
記述が「連携」「ネットワーク」に言及
しています。個々での活動には限界があ
るが、他の組織や団体、専門家と連携す
ることによって、お寺という場を活かし

ていくことができるという指摘でありま
しょう。実は、多くの活動団体が、活動
の場所の確保に苦慮しています。こうし
た方々と連携することは、大変に良いア
イデアであろうと思います。

しかし、それについても情報が必要で
す。この情報を、どのように共有し、発
信していくかは、宗門に科せられた課題
の一つと言えるでしょう。

■おわりに

今回検討した設問は、皆様の生の声を
聞かせていただくことを目的として、設
定しました。十の分類と、二つの視点か
ら、皆様からいただいたご意見を報告し
てきましたが、これだけで、記述いただ
いた内容を網羅的に拾い上げるまでには
至っていません。

回答いただいたお一人おひとりが、日
常の中でさまざまな事柄に接し、課題を
発見され、その課題の解消に取り組まれ
ています。そうした皆様方からの現場の
お声を直接いただき、引き続き教学伝道

(常任研究員 藤丸智雄)

教学伝道研究センターでは、認定N
 PO法人・東京自殺防止センターと共
 催で、二〇一〇年二月五日（金）に
 「自殺防止フォーラム『生きる』こと
 の支援〜いま、京都からの発信〜」と
 題して、講演会とパネルディスカッシ
 ョンを開催いたします（参加費無料、
 申し込み不要）。

また、フォーラム終了後の五日夜から六日（土）・七日（日）の三日間、自殺防止のための電話相談の具体的な対応方法を学ぶワークショップを開催する予定です。詳細は、教学伝道研究センターホームページをご覧ください。多数のご参加をお待ちしております。

i 設問では「1つお選びください」としていましたが、複数選択された方が多数いらつしやいましたので、項目の総和は

相談に来たり、僧侶に打ち明けたりすることは少ないかもしれませんが、宗門の取り組みが社会的に認知されていくことで、これから相談されることが増えるかもしれません。寺院の掲示板に「悩みを打ち明けてみませんか」などの掲示をすることで受け入れる姿勢を積極的に示すこともできるでしょう。僧侶や寺院は日本社会において、その数からしても極めて大きな存在です。相談の選択肢の中に僧侶が入ることで、相談者への窓口が大きく開かれることになります。また、例えば突然に住む場所を失った人のために寺院が居住場所を提供するなどのこともできるのではないのでしょうか。地域性にも大きく左右されるでしょうが、再出発が難しい社会構造がある中で、そうした人を支えるために、寺院にはもつといういろいろな可能性があるように思います。このように寺院が敷居を低くして、さまざまな苦悩を抱える人にお寺に来ていただくとともに、僧侶が寺院の外に出ていき、民間のボランティア活動に参加するといふことも重要ではないでしょうか」（『宗報』十一・十二月合併号）。